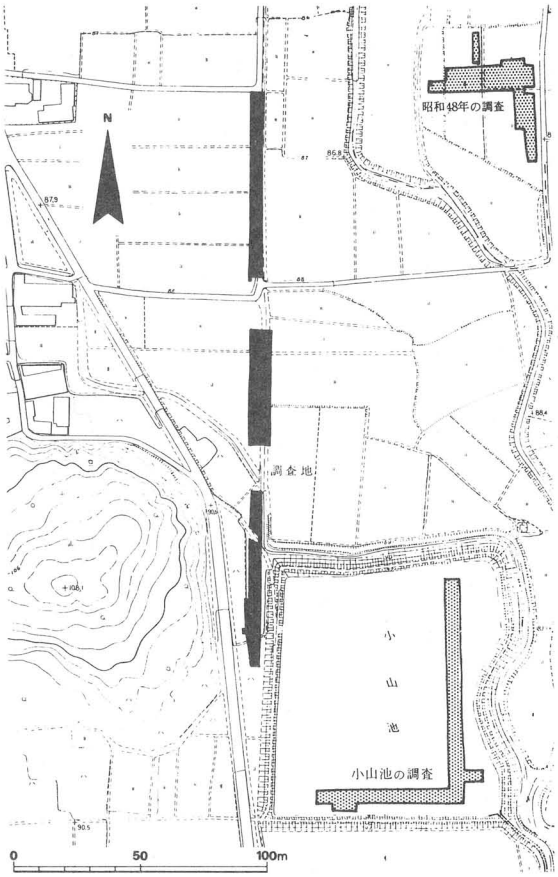
藤原京左京九条三坊・十条三坊の調査（耳成線第１次）

（昭和55年10月～昭和55年11月）

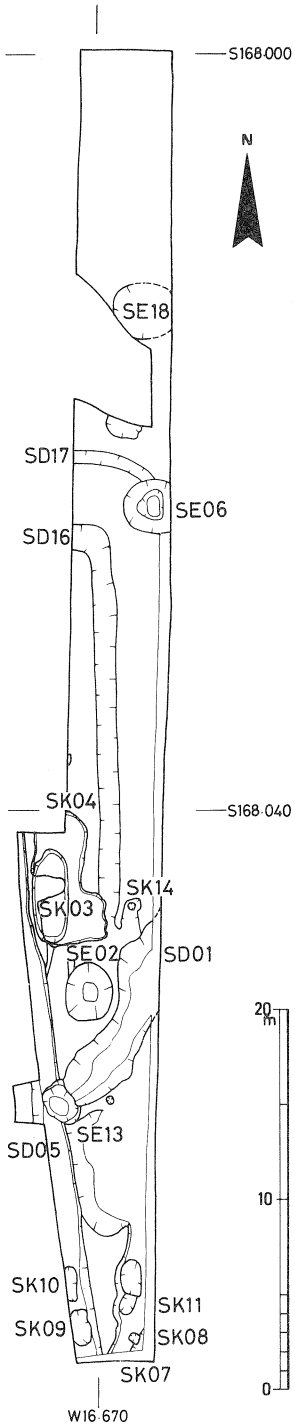
この調査は，橿原市出合町から明日香村に至る村道（国道165号～耳成線）改良工事に先立って，明日香村域で実施したものである。調査地は大官大寺の西方，小山集落の東方約70ｍの水田である。また，この地域の水田は，通称ギオ山の山裾部にあたり南から北に向かってやや傾斜している。

調査地は藤原京の推定条坊では左京九条三坊，十条三坊にあたることから，今回の調査では九条大路および坊内の遺構の検出が期待された。なお調査対象地は南北230 ｍ，東西12ｍの道路敷地であるので，南北方向に長い調査区を３区（南・中・北）設定して，調査を行った。

調査区の層序は南区の南半と北半では異なっている。南区南半の層序が耕土，床土，茶褐色土，黄褐色土，淡黄褐色土（地山）となるのに対して，それ以北では，床土直下に整地土である黄褐色土がみられ，以下暗青灰色粘土，黒灰色粘土となる。この整地土は厚さ0.６～1.５ｍあり，南区の北半から北区北端までの間，南北約180ｍにわたって連続して存在しさらに北に続くものと考えられる。整地土の土質は南区南半の黄褐色粘土や地山と類似する。また整地土の上面は南端と北端では1.65ｍの



調査地位置図（1：3000）



南区遺構配置図（1：400）

比高差があり，南から北へ傾斜している。整地土から少量の土師器・須恵器のほか，円筒埴輪が出土した。

整地土下の暗青灰色粘土面と整地土面で遺構を検出したが，南区南半では黄褐色粘土面と地山面で検出した。整地土と黄褐色粘土層上面で検出した遺構には，中世以降のものと7世紀代のものがある。従って，ここでは暗青灰色粘土ないし地山上面で検出した遺構をA期，整地土と黄褐色粘土層上面で検出した遺構のうち7世紀代のものをB期，中世のものをC期と大別し，各調査区ごとに説明する。

南区の遺構　A期の遺構には調査区北端で検出した弥生時代の土壙 SK 07～11がある。いずれの土壙からも，畿内第V様式土器が出土した。

B期の遺構には井戸 SE 02・06，溝 SD 01・05，土壙 SK 03・04がある。

井戸 SE 02 は深さ2.2mあり，岩盤まで掘込まれている。井戸枠は抜取られており，下層に岩盤の崩壊土，上層にカーボンを多く含む暗灰褐色土が堆積していた。埋土の上層からは銅滓，フイゴの羽口，重弧文軒平瓦，土器，馬の四肢骨が出土した。井戸 SE06の井戸枠も抜取られており，抜取り跡は平面形が径2.4mの円形を呈し，深さは2.8mある。井戸内からは，重弧文軒平瓦，土師器，須恵器が出土した。

斜行溝 SD01は SE02の南東にあり，西には続かない。幅1.6～2.5m，深さ0.8mあり，堆積土は2層に大別される。下層からは北西岸から投棄された状況で重弧文軒平瓦，平瓦，銅滓，建築部材，土器が出土した。南北溝 SD05は，幅1.8m，深さ0.4mの規模

で長さ28mにわたって検出した。堆積土は2層に大別され，重弧文軒平瓦が1点出土した。土壙SK03・04は重複しており，SK03が新しい。SK03は平面楕円形を呈し，長径4.8m，短径2.3m，深さ0.2mある。土壙内には銅滓を含む焼土が充満していたが，壁面は焼けていない。付近に炉址の存在が予想されたが，調査区内には検出されなかった。SK04は南北7m，東西4mの不整形な土壙で，深さ0.2m～0.3mある。土器小片のほか馬の下顎骨が出土した。

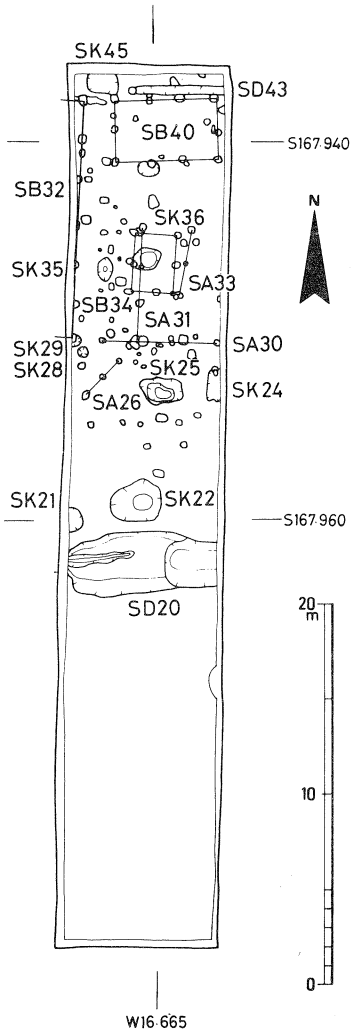
C期の遺構としては井戸SE13・18，溝SD16・17，土壙SK14がある。井戸SE13は，深さ2.5mの石組み井戸で，埋土からは青磁片が出土した。SE18は平面が円形を呈する井戸と思われるが，その大半が崩壊しているため，本来の形態・規模は不明である。

SD16・17はギオ山の山裾をめぐると考えられる溝である。ギオ山には中世の山城の存在が想定され，或は山城に関連する施設とも考えられる。

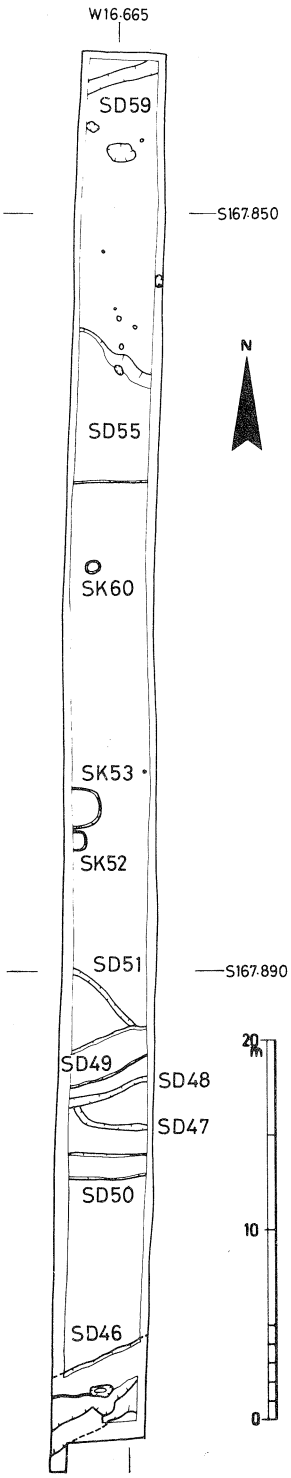
土壙SK14は径0.9mの円形を呈する土壙で，深さが0.6mある。最下部に小石を敷き，曲物側板の痕跡を側壁に残している。この曲物内に石が2段に積み上げられ，細長い河原石が1石中央部に落込んでいた。副葬品などはみとめられなかったが，立石を伴う埋葬施設ではないかと思われる。

中区の遺構　C期の小溝のほかは全てB期の遺構であり，掘立柱建物3，掘立柱塀4，溝2，土壙9と小穴がある。

SB40は桁行3間，梁行2間の東西棟建物で，柱間寸法は桁行が1.8m等間，梁行が1.65m等間となる。柱掘形は一辺0.5m前後の隅丸方形で，いずれも柱痕跡を残す。SB32は南北棟建物で，桁行6間分を検出した。柱間寸法は2.1m等間で



中区遺構配置図（1：400）



北区遺構配置図（1：400）

あり，東側に3間の目隠し塀 SA 31が伴う。SB 34は桁行2間，梁行1間の南北棟建物で，柱間寸法は2.1m等間である。柱掘形の重複関係から，SA 31より新しい。SA 33はSB 34の東にある南北2間の塀である。重複関係から，SB 34より古い。SA 26は2間の塀で，方眼方位北に対して約45°東に偏している。

東西溝 SD 20は，幅約3m，深さ約0.5mの素掘りの溝である。溝からは飛鳥Ⅳ・Ⅴ段階の土器が出土した。東西溝 SD 43は幅0.6m，深さ0.4mの規模で，断面形はU字形を呈する。溝からは飛鳥Ⅳ段階の土器が出土した。また，この溝はSB 40の柱掘形を切っており，SB 40より新しい。

土壙には，深さ0.4～0.7mで埋土に炭化物をわずかに含むもの（SK 22・25・35・36）と深さ0.1m前後で皿状の断面形を呈し，炭化物を多く含むもの（SK 21・28・29・45）がある。土壙 SK 22・35・36・45からは飛鳥Ⅲ段階からⅣ段階の土器が出土している。なお，SK 29は重複関係からみて，SB 32より新しい。

以上のように，B期の遺構は地割の区画と考えられる東西溝 SD 20の北に集中しており，時期的には7世紀第Ⅳ四半期の遺構が多い。しかし，重複している遺構も多く，建物・塀の方位には方眼方位北に対して東へ偏するもの（SB 32・34，SA 30・31・33・26）と西へ偏するもの（SB 40）との2群があるなど，これらの遺構がさらに時期的に細分される可能性が強い。

北区の遺構　A期の遺構には弥生時代の斜行溝 SD 49・55・59，古墳時代の斜行溝 SD 46～48・51，時期不明の土壙 SK 52・53がある。斜行溝 SD 46は幅3

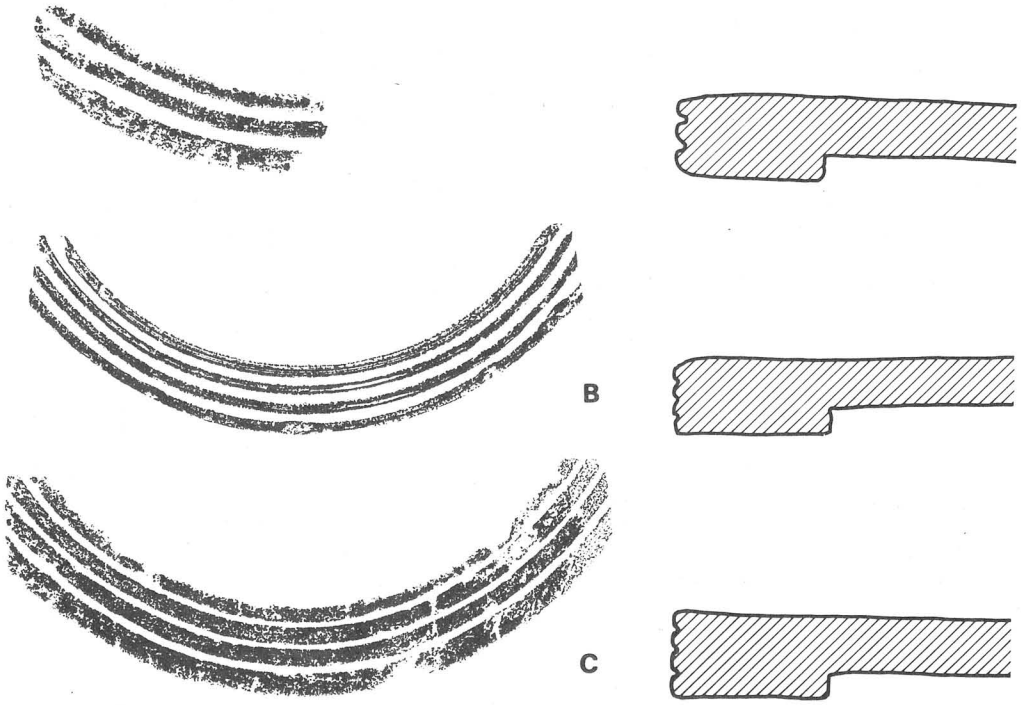
m，深さ0.4 mの規模で，中からは6世紀後半と推定される土器が出土した。

B期の遺構には土壙SK60と東西溝 SD 50がある。SK 60の平面形は径0.7 mの円形を呈し，深さは0.2 mある。埋土は整地土と同質の黄褐色土であり，中から飛鳥Ⅱ段階の土師器が出土した。

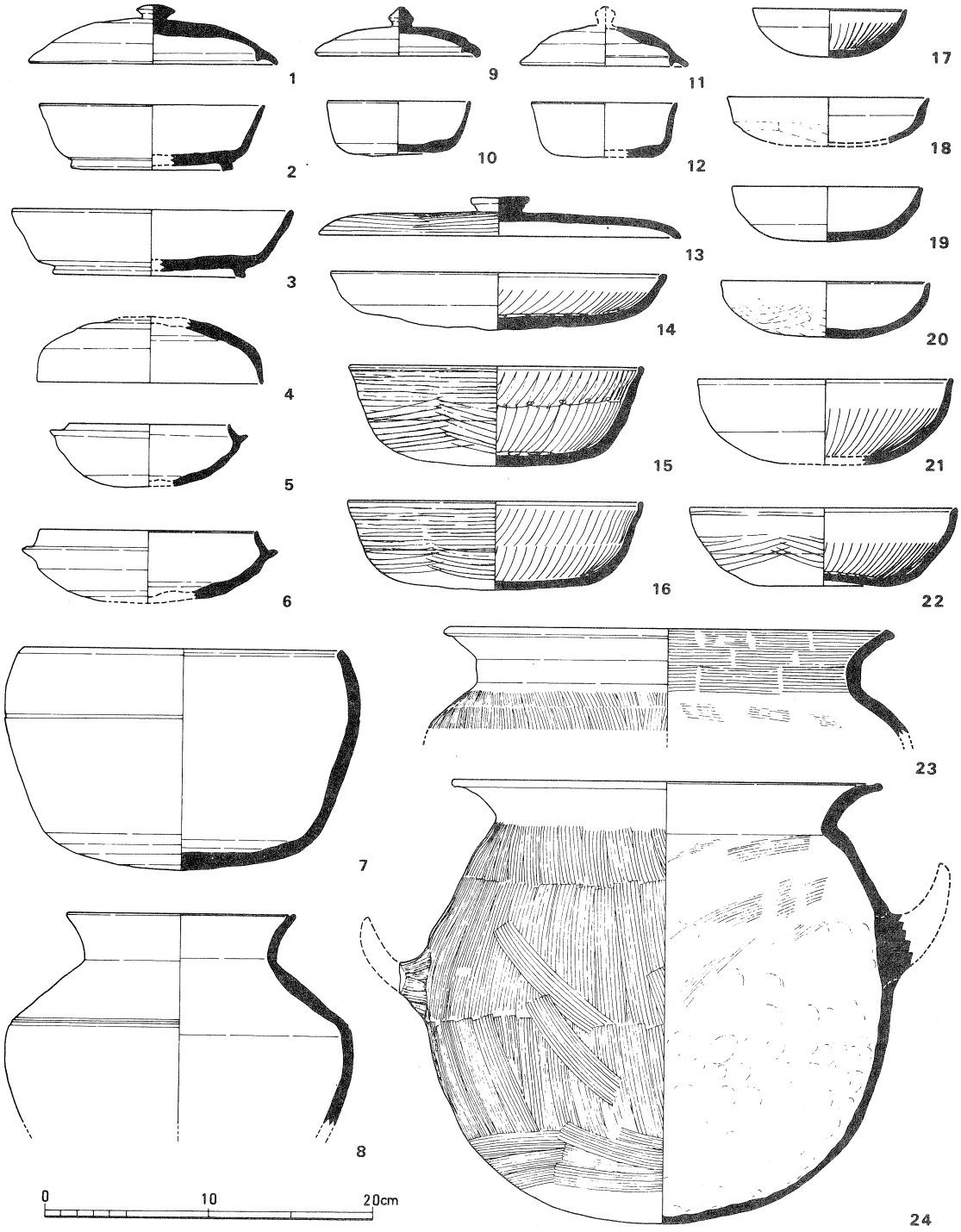
東西溝 SD50は幅2.5 m，深さ0.8 mの素掘りの溝である。溝内からは飛鳥ⅣないしⅤ段階と考えられる土師器が出土した。この溝は九条大路南側溝の位置にあたるが，北側溝に相当する溝は，調査区内では検出していない。調査区の東方にある大官大寺下層で検出した溝SD 517（概報10）を北側溝とすれば，側溝心々距離は約14.7 mとなる。

出土遺物　瓦，土器，木製品，金属製品などがあり，弥生時代から中世に至るものが含まれている。

瓦は軒丸瓦9点，軒平瓦53点，熨斗瓦33点，面戸瓦4点のほか丸・平瓦がある。軒瓦では大官大寺所用瓦6231型式9点，6661型式7点のほかはいずれも重弧文軒平瓦である。重弧文軒平瓦には三重弧文3点，四重弧文47点がある。後



南区出土軒平瓦実測図（1：4）



出土出器（床土；1・2・10・12,整地土；5・11・18・19,暗青灰色粘土；4,SD20；3，8，SE02；6・15・21・23, SD 01；7,SK22；9,SK60；17・22,SD43；13・20, SD50；14, SK45；16 , SK35；24)

者は施文具の違いにより四種に細分でき，ここではＢ・Ｃを図示した。また，平瓦には凸面布目のものが比較的多く認められる。

土器は７世紀代の土師器・須恵器が出土量の大半を占めている。図示した土器のうち，整地土から出土した須恵器（５）や整地土下から出土した土器は飛鳥Ⅰ段階に近い様相を示している。また，土壙 SK60出土の土師器（17・22）は，坂田寺跡池 SG 100 出土土器と共通した特徴を示しており，これらの土器は飛鳥Ⅱ段階と考えられる。

木製品では SE 02から曲物，整地土下から漆製品が出土した。

まとめ　今回の調査では，当地域内で７世紀前半に大々的に整地事業が行われた事実を確認するとともに，７世紀後半の建物，井戸等を検出した。

整地土は，0.6～1.5ｍの厚さで南北の長さは180 ｍに及んでいる。これまでの調査で大官大寺寺域内にも同様の整地土を確認しており（概報４），これらの整地土が一連のものとすると，東西の範囲は長さ約100 ｍ以上となる。整地の行われた時期は，整地土上面から掘込まれた土壙ＳＫ60出土土器や整地土及びその下の暗青灰色粘土層出土土器から７世紀第Ⅱ四半期頃と推定される。以上のように出土土器の示す年代観と整地が大規模であることを考慮し，整地の要因を宮都の造営に結びつけるとすると，舒明朝の「飛鳥岡本宮」或は斉明朝の「後飛鳥岡本宮」の造営との関連も考えられ興味深い。

７世紀後半の遺構のうち，藤原京関係の遺構としては，九条大路の南側溝と推定される溝１条のみで，その他の遺構は藤原京に先行する時期のものと考えられる。建物の配置やその性格等については不明な点が多いが，大官大寺下層においても７世紀の建物や井戸が明らかにされており，それらの遺構と一連のものと考えられる。また，出土した瓦のうち，大官大寺所用瓦ではない重弧文軒平瓦が50点出土したことは注目される。これらの瓦から調査地付近に瓦窯あるいは大官大寺より古い寺院の存在が推定されるようになった。

以上のように，この調査は道路敷部分という限定された調査ではあったが，上にみたような多岐にわたる問題が提起された。さらに今後周辺地域の調査の進展を待って検討したい。